

4. 貸付資本の成立

貨幣資本と現実資本との分離

今回のキーワード

- ⊕ 信用と信頼
- ⊕ 設備投資資金の長期貸付
- ⊕ 高利貸し

今回の課題

- ✓ これまでは自己金融を仮定
 - ⇄ しかしここで企業間の資金融通を説明する。
- ✓ 実際には金融機関によって仲介
 - ⇄ しかしここでは金融機関は無視する。

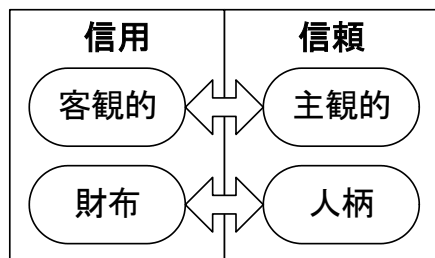
1. 信用の2つの形態

1.1 信用とは何か？

信用の二つの形態

1. 市場社会の下での掛売
 - ※ [前近代社会でも、ある程度市場が発達すると]
 - 貨幣支払に対する信用
 2. 資本主義社会の下での企業向け貸付
 - 特に設備投資資金の長期貸付
 - 信用制度＝銀行制度の下での貸付
 - 貨幣返済に対する信用
- 所有権が絶対的＝物権的権利と
相対的＝債権的権利とに分離

信用と信頼



信用の意義

- 掛売
 - 代金支払に対する信用
 - 取引はすでに成立した
 - 有効需要の置換
- 貸付
 - 金銭返済に対する信用
 - これから取引を引き起こす
 - 有効需要の増大

1.2 信用売り

単純商品流通における信用と
そのシステム化

掛け買いの発生

- 生産者間では掛け買いが
必然的に行なわれる。
 - 生産期間と販売期間との不一致
 - ↓ ここから
 - 貨幣必要時点と貨幣入手時点との不一致
- ジーパン生産者だと
 - ジーパン（生産物）を
問屋が引き取ってくれるのは来月の5日。
 - デニム生地（原料）をいま買わなければ
生産ラインがストップしてしまう。

掛け売りは信用売り

- デニムの生地の生産者は
“来月の5日に生地の代金を支払います”
というジーパン生産者の支払約束を
信用した。
- ∴何故ならば、以下のように、
信じるに足る客観的な根拠・条件が
成立していたから、すなわち、――

掛け売りは信用売り：主要根拠

- ∴主として、――
ジーパン生産者のフローの財務表等を調べて、
“確かにこのジーパン生産者のジーパンは
毎月、売り上げを上げていて、
そして毎月5日に代金が支払われている”
ということを知っているから。
- 商品生産を業として営んでいる限り、必ずや、
定期的に商品が売れ、貨幣収益が生じる。
- 営業実績から見て、
個人の主観的な人柄・性向等とは別に
代金を支払うと客観的に信用することができる。

掛け売りは信用売り：副次的条件

- ∴あくまでも副次的に、——
 ジーパン生産者の**ストック**の財務表等
 （資産貸借対照表・土地登記簿etc）を調べて、
 “たとえ万が一、このジーパン生産者が
 支払不能になっても、代物弁済が可能だ”
 ということを知っているから。
- ただし、支払に対する信用が成立している限り、
 代物弁済は、掛けの買い手の債務不履行という
 予期しない結果に対応するための、
 望まない最後の手段であって、
 しかるに決して目的ではない。

前払いは信用の欠如

- 後払は信用の存在
 - 支払約束を信用している。
- 前払は信用の欠如
 - 代金を支払うかどうか
 信用することができないからこそ、
 前払いを要求する。

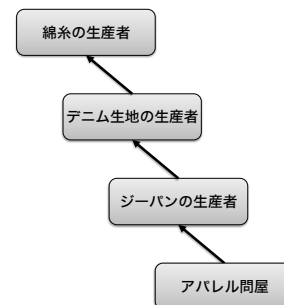
掛け売買の連鎖

来月の5日になれば、
 ジーパン生産者が
 生地代を
 支払ってくれるんで、
 私は綿糸の代金が
 支払えます。

ジーパン生産者：
 “来月の5日になれば、
 アパレル問屋が
 ジーパン代を
 支払ってくれるんで、
 私は生地の
 代金が支払えます”

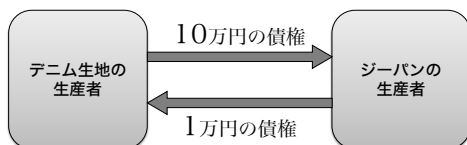


支払期日になると...



相殺と決済

- デニム生地屋は
 - 生産者としてジーパン屋に
 生地（10万円）を掛けで売り、
 - 消費者としてジーパン屋から
 ジーパン（1万円）を掛けで買う。



相殺と決済

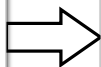
- 1万円は**相殺**することができる。
- 残った9万円だけ**決済**すればいい。



手形の発生（発行）

- ジーパン生産者が書く債務証書の支払約束の文言を変えれば手形が発生する。

現金1000万円を
来月5日に、
**デニム生地
の生産者に**
支払います。

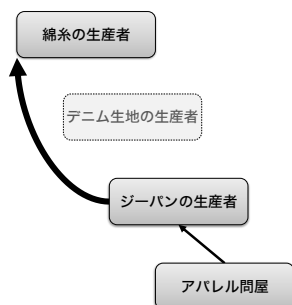


現金1000万円を
来月5日に
**この紙切れを
持ってきた人に**
(受取人あるいは
その指図人に)
支払います。

手形の流通

- 掛け売買がスムーズに進む。
 - 予備の購買準備金が減少する。
 - 現金支払が一回で済む。
 - 転々の裏書流通によって掛け売買の連鎖が媒介される。
- ↓ これらによって
- 流通費用の社会的節約

手形を廻した場合には



信用システムの自然発生

- 掛け売買から発生する自然発生的な信用システムは：
 - まだ人為的な銀行制度が成立していなくても、市場の内部ですでに十分に発達しうる。
 - 掛け売買の連鎖と債権・債務関係の相殺および差額の決済とを媒介するシステムである。

銀行制度による 信用システムの包摂

- 要求払預金を取り扱う銀行制度はこのような自然発生的な信用システムを：
 - 実質的には基礎にしている。
 - なお、銀行業者と形式的に似ている高利貸しは信用の欠如を基礎にしており、信用制度としての銀行制度とは正反対。
 - 一般に、市中銀行間での当座預金の振替（結局は中央銀行当座預金の振替に発展する）という形で包摂する。
 - 特に、手形の場合には、手形交換所における相殺と交換尻の決済。

2. 貸付の2つの実体

高利貸しと企業向け貸付

貸付の二つの実体

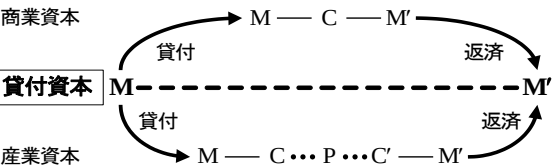
- 1. 前近代の共同体の下での高利貸し
※ [資本主義社会でも消費者向け貸付においては]
 - 信用の欠如の表現
- 2. 資本主義社会の下での貸付
 - 信用制度＝銀行制度の下での貸付
 - 一般的な期待利潤率が出発点
 - 信用の存在の表現

貸借対照表で見ると…

借方		貸方		
資産	負債	他人資本	}	金融機関からの借入、社債など ＝有利子負債
	資本	自己資本		買掛金、支払手形など ＝無利子負債

貸付資本

- 基本ラインは企業間での金銭貸借
→ 実際には金融機関によって媒介



元本返済・利子支払能力

- 企業活動すれば、定期的に、利潤をとまう売り上げを期待することができる。
- 実際に獲得した利潤の中から利子を支払うことができる。

利潤	
利子	企業利得

貨幣市場の形成可能性

- 企業活動の中で
 - 一方では資金供給
 - 余分な無駄金、準備金、積立金など
 - 他方では資金需要
 - 追加投資、固定設備の更新など

利子のコスト化

- 利子分しか稼げない企業活動は無意味になる。
- 社会に存在するすべての貨幣は利子を生むはずの資本になる。
- 割引現在価値
- 資本還元

実体経済と貨幣経済

- 企業活動によるカネモウケ
(利潤を生む) から
貸付によるカネモウケ
(利子を生む) が分離
- ↓ これによって
- 実体経済から貨幣経済が分離

貸付資本の歴史的意義

- 前近代の共同体の高利貸し
 - 消費者・非商品生産者向けの高利貸付
 - 利率の上限なし
- 現代社会の貸付資本
 - 企業の設備投資向けの低利貸付がベース
 - 期待利率が利率の上限
 - 逆に言うと、現代社会でも、消費者向け貸付は高利
 - 利率の法的上限の必要性
 - 闇金業者
 - 消費者金融への銀行の参入
- ひとえに、産業を企業が支配しているかの違い

法律的所有と経済的所有との分裂

- 法律的所有
 - 貸し手企業
 - 貸し出された貨幣資本の所有権
- 経済的所有
 - 借り手企業
 - この貨幣で買われた現実資本の所有権

銀行による信用創造の場合には…

- 単なる私的企業である銀行が
情報を集中し、借り手企業の経営の
モニタリングを行う。
- 既にある潜在的貨幣資本の
単なる有効利用ではなく、
貨幣資本そのものの新たな創造が
行なわれる。

株式会社の場合には…

- そもそも私的所有者（資本家）が
日常的なモニタリング（経営執行）から
排除される。
- そもそも現実資本が
資本家の所有物ではなくなる。